

肯定についての試論

An Essay on Saying Yes

岸貴介

Takayuki Kishi

Abstract

This paper first deals with the meaning of “saying Yes”. It also asks if the things to which we say “Yes” are “good” (and if “saying Yes” is “good”). As a result, the meaning of “saying Yes to our life” or “saying Yes to the reality in the world” becomes clearer. The result shows how difficult such a “Yes” is, and finally it explores how we can realize it.

I. はじめに

「...Trotzdem Ja zum Leben sagen」と題された本がある。ナチスの強制収容所での体験に基づいて著されたフランクル (Viktor E. Frankl : 1905-1997) の作品である。直訳すれば「…それでも人生にイエスと言う」となるが、「…それでも人生を肯定する」とも訳せる。¹何れにせよ、この表題の彼の本には、(共通の話題も含むものの) 内容を異にする二つのものがある。一つは 1946 年 3 月及び 4 月にウィーンで行われた三つの連続講演を収めた作品。²もう一つは、我が国では『夜と霧』の名で知られている作品『Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager (一心理学者、強制収容所を体験する)』(原著 1946 年) が、著者存命中の 1977 年に「かなりの異同」³を伴い改訂された際に、原著と同時期 (1948 年) に偽名で発表されていた別の文書「Synchronisation in Birkenwald (ビルケンヴァルトの共時空間)」⁴と共に一冊の書物となったものである。⁵故に、『夜と霧』(の少なくとも新版) もまた件の書名に相応しい内容であると当の著者が見做していたことが窺える。

¹ ドイツ語には、「イエス (Ja)」と「言う (sagen)」という二語を一語にした「Jasagen」という語があり、これは一般に、「肯定」・「承諾」・「同意」などと和訳される。つまり、「何かを『肯定する』とはその何かに対して『イエスと言う』ことである」という一般的な理解があると言える。ドイツ語には他に、「bejahen」・「Bejahung」といった言葉もあるが、これらもそれぞれ「肯定する」・「肯定」と訳されるものである。(なお、今の場合、「be-」・「Be-」は共に「付与」などを意味する前綴りで、「-(h)en」・「-(h)ung」はそれぞれ単に動詞・名詞を意味する部分。) ここにも、「Ja」と「肯定」との繋がりが指摘出来る。

但し、例えば英語の場合には若干注意すべき点がある。即ち、「肯定」の語を和英辞典で調べてみると、その代表例として「affirmation」という語が出てくるが、これは語感としては(「肯定」というよりも寧ろ)「断言」の意味合いが強い。よって、今の場合は不適であると考えられる。従って、本稿の表題の英訳でも「affirmation」という語は使用せず、「saying Yes」という表現を使用した。

何れにせよ本稿では、何かを「肯定する」とはその何かに対して「イエスと言う」ことであると解する。これは我々の通念にも則っていよう。(故に、ドイツ語や英語の表現を引き合いに出すのはあくまでも参照のために過ぎない。大事なのは事柄としてどうかということである。) 従ってこれ以降、特に断りの無い限り、原則として、両者を同じ意味に扱い、その上で、「肯定する」という表現に代表させる。

² FRANKL, Viktor E., ... *Trotzdem Ja zum Leben sagen. Drei Vorträge*, Franz Deuticke, Wien, 1947. (以下、「FRANKL1947」と略記。)

³ フランクル、ヴィクトール・E、『夜と霧 新版』、みすず書房、2002年、166頁(「訳者あとがき」)

⁴ アウシュヴィッツ第二強制収容所が建設されたビルケナウの、その周辺の森ビルケンヴァルトを舞台に、時代の異なる三人の哲学者(スピノザ、ソクラテス、カント)ほかを登場人物とする哲学的戯曲。

⁵ FRANKL, Viktor E., ... *Trotzdem Ja zum Leben sagen. Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, Kösel, München, 1977, Neuauflage, 2009. (以下、「FRANKL1977」と略記。)

ともあれ、何れの作品も、著者の静かな語り口の中に、言わば「地上の地獄」——という表現が適切なのかどうかは分からないが——を体験した者の言葉が持つ迫力と説得力が感じられる。また、文字通り生きることが困難な中であって、「それでも人生を肯定する」という姿勢を持つことが出来た人々のありようは、読む者の感動を誘う。⁶

ところで、管見の限りでは、それら何れの作品でも、「そもそも、『肯定する』とは一体どういう意味なのか」という疑問を態々提出することは為されてはいないようである。⁷

また、我々の日常生活においても、普通、問われるのは、『肯定する』とはどういうことか」では全くないし、『人生を肯定する』とはどういうことか」ですらない。寧ろ、「どうしたら『人生を肯定する』ことが出来るのか」なのであり、もっと言えば、「どうしたら幸せになれるのか」なのである。(そして勿論、こうした問いとても日常的に問われるわけではないし、また、それは或る意味で当然だろう。そのような問いを日常的に問う姿勢は、見ようによっては確かに、既にどこか不健全にすら見える。)

だが、それでも、『肯定する』とはどういうことか」という問いは、無意味な問いでは必ずしもない。このように問い、検討することで、見えてくるものがあるかも知れないからである。更に言えば、そのような「遠回り」をすることによって、「どうしたら幸せになれるのか」こそを問うという「普通の道」で我々を待ち構えている困難を寧ろ解決することが出来るかも知れないからである。

勿論、得られていない成果をそれに至る議論の正当化の根拠にするというこうした議論には循環がある。それ故寧ろ、前置きはここまでにして検討に着手することにしよう。⁸

II. 「肯定されるもの」は「よいもの」か

さて、「人による」と言われればそれまでではあるが、概して言えば、我々にとって、「自

⁶ 両作品から窺われるフランクルの姿勢と思想は好意的に受容されているようである。我が国の場合で言えば、NHKの番組「100分 de 名著」で『夜と霧』が取り上げられている(2012年8月及び2013年3月)事実からもその点は窺われる。

なお、同番組のテキスト(『100分 de 名著 フランクル 夜と霧』、NHK出版、2012年)の著者である諸富祥彦氏は他の機会にも彼を紹介している(例えば、『人生に意味はあるか』(講談社現代新書、2005年)など多数)。他にも、例えば武田修志氏の著作(『人生の価値を考える 極限状況における人間』、講談社現代新書、1998年)や、秋山智久氏の論文(「人間の苦悩と人生の意味——社会福祉哲学の根本問題——」(『學苑 人間社会学部紀要』、第84号、昭和女子大学、2011年、45~59頁))の中でも、彼が好意的に取り上げられている。また、彼の件の連続講演の和訳『それでも人生にイエスと言う』(春秋社、1993年)には、訳者の一人である山田邦男氏による「解説 フランクルの実存思想」がある。

以上は何れも、批判的検討は欠くものの、両作品から窺われる彼の姿勢や思想を知る上で有用である。⁷ 勿論、こういう言い方には反論もあろう。曰く、「彼は生きる意味の問題をちゃんと考えている。彼は、我々人間は生きる意味を問いながら生きるべきではなく、生きることに問われながら生きるべきであるという、彼独自の生き方を説いている。これは人生を肯定することの意味を彼なりに問い、考え続けたその結果として得られた答えである…」

確かに、彼のこうした見解は貴重であるし、本稿でも後ほど(IVで)あらためて言及・検討される。だが、彼が、「肯定する」とはそもそもどういうことかというところにまで遡って問いを整理・展開しているかと言えば、(少なくとも両著書においては)そうではないように筆者には見える。寧ろ彼は、体験を通じた実感が多分に関与することによって件の見解に到達している、と、そのように思われる(勿論、「体験を通じた実感」だけではない筈ではあるが)。先に用いた言い方をすれば、それは確かに「迫力と説得力」を持つ。ただ、敢えて言えば、そこには、答えに至るまでの丁寧な検討が欠けているようにも思われる。筆者にはその点が気になるということである。

⁸ 念のために予め確認をしておく、本稿はフランクルの思想を対象とした研究論文ではない。本稿の主題・関心が「(自分の人生や世界の現実を)肯定する」ということにあり、そして、彼の議論がその主題・関心を本稿と共有する限りにおいて、本稿はこれも参照する、ということである。

分の人生を肯定出来るかどうか」は、(日常的には問うていなくとも、結局は) 人生の大問題だろう。また同様に、「世界の現実を肯定出来るかどうか」は人類の大問題だろう。⁹

それでは、「肯定する」とはそもそもどういうことか。例えば、「そのまま認めること」と言い換えられそうである。実際、例えば、「相手の意見を肯定する」とことと「相手の意見をそのまま認める」とことは同じだと言える。だがその場合、今度は、「そのまま認める」とはどういうことかという問いが出て来る。つまり問いが置き換わっただけとなる。

そこで、問い方を工夫してみたい。即ち、「『肯定されるもの』は『よいもの』か」と問うてみたい。一方では、素直に判断する限り、「肯定されるもの」は「そのまま認められるもの」であるのだから当然「よいもの」だと思われる。¹⁰ 実際、先に言及した「大問題」というのも、要するに、「自分の人生」や「世界の現実」を「よいもの」に出来るかどうか(或いは、「よいもの」と見做すことが出来るかどうか)という問題であるとも言える。

(そして、通常提出されるのは、「では、『よいもの』とはどういうものか」という問いではなく、「では、どうしたら『よいもの』に出来るのか」という問いである。)

だが、他方では、少し考えれば分かる通り、ここには疑問も提示出来る。即ち、実際のところ、「肯定されるもの」は必ずしも「よいもの」ではない。例えば、「詐欺師である悪い息子を親は不本意ながらそのまま認めている」という場合である。この息子は、「そのまま認められている」という点では確かに「肯定されている」が、しかし、それが「不本意ながら」である以上、「よいもの」とは必ずしも心からは思われていない。(なお、加えて言えば、こうした親の姿勢も「よいもの」とは必ずしも言えない。)

すると、やはり、「肯定されるもの」は、(そして「肯定すること」もまた、) 必ずしも「よい」とは言えないことになる。この、「肯定する」や「そのまま認める」とことと「よい」とのズレに注目したい。そこで、あらためて次の二つの疑問について考えてみたい。

- ・ 疑問その 1: そもそも「肯定する」とはどういうことか
- ・ 疑問その 2: そもそも「よい」とはどういうことか

まず、疑問その 1 について。注意深く検討してみると、「肯定する=そのまま認める」という同一の表現も、実際には、少なくとも次の四通りの意味を区別することが出来る。

- ・ A: (本当によいと思うので) そのまま認める
(例: 人気歌手の新曲を聞いて、「いいね!」と思う時)
- ・ B: (その通りだと思うので) そのまま認める
(例: 現住所の確認をされて、「そうです」と答える時)
- ・ C: (条件を満たすと思うので) そのまま認める
(例: 提出書類に不備が無いことを確認して、「OK です」と言う時)
- ・ D: (積極的に認めるわけではないが) そのまま認める
(例: 本当はそうでもないけれども、「まあいいか」と思う時)

⁹ この二つの問いは、重なる部分も大きい、ずれる部分もある。大きな違いは、例えば、自分の人生を肯定出来ない時には自殺によってそれを終わらせることが出来るのに対して、世界の現実を肯定出来ない時でもそれを終わらせることは出来ない(精々のところ、自殺によって自分の人生を終わらせることぐらいしか出来ない)、という点に見出せる。

¹⁰ なお、「是認する」・「承認する」・「賛成する」などと訳されるドイツ語「gutheißen」が、直訳では「よい(gut)と称する(heißen)」・「よい(gut)という意味である(heißen)」・「よい(gut)ということである(heißen)」などとなることも、「肯定されるもの」と「よいもの」の結びつきを示唆していよう。

こう見ると、例の親の態度は D に該当することが分かる。では、すると、この時の D の「まあいいか」の「いい」とは如何なる意味か。そこで次に疑問その 2 に進みたい。¹¹

我々は色々なものに「よい (いい)」という言葉を使っている。それは例えば、①「よいパソコン」、②「よい行い」、③「よい気持ち」、④「よいお日柄」…などである。確かにこれらは同じ表記（「よい」）の言葉ではあるが、では、同じ意味の言葉なのだろうか。

実は、「よい」には例えば次の字が充てられる：①良い、②善い、③好い、④佳い。そして、これらは概ね、上の①～④に適用出来る。

- | | |
|----------|----------------|
| ① 良いパソコン | …すなわち、優れたパソコン |
| ② 善い行い | …すなわち、道徳的な行い |
| ③ 好い気持ち | …すなわち、快い気持ち |
| ④ 佳いお日柄 | …すなわち、おめでたいお日柄 |

この内、特に注目したいのが①②③であり、これらは次のようにはっきり区別出来る。

- | | |
|-----------------|---------------|
| ① 良い：優良な・出来がいい | (⇔ 劣悪な・出来が悪い) |
| ② 善い：善良な・道徳的な | (⇔ 邪悪な・非道徳的な) |
| ③ 好い：好ましい・満足できる | (⇔ 嫌な・満足出来ない) |

即ち、①は性能のよさ、②は道徳的なよさ、③は個人的な好ましさを意味している。

勿論、例えば、「鞆を買うならモノが①良いのが③好い」とか、或いは、「結婚相手は心根が②善い人が③好い」というように、一つの対象に複数の意味の「よい」が重なる時もある。だがそれでも、それらははっきり区別出来る。また、漠然とした使い方がされる時には、通常は、一般的な、「良い」の字が充てられる（但し、この点はこれ以上注目しない）。

また、①～④のように特定の漢字（「良」・「善」・「好」・「佳」）と直結してはいないものもある。例えば、⑤「適切な」・「ふさわしい」という意味の「よい」がある。例えば、「よいタイミング」の「よい」を、こう解することも出来る（即ち、「状況から見て適切なタイミング」ということである）。¹²所謂「目的としてよい」と対照的なものとして語られる「手段としてよい」というのも、この⑤よいに属すものと位置付けられるだろう（つまり、「よい手段」とは「目的実現のためにふさわしく適切な手段」のことである、と言える）。

更に、これら①～⑤の他にも、⑥「構わない」という意味の「よい」や、⑦「充分な」という意味の「よい」を挙げることも出来る。例えば、「別にそれでいいや」と言う時（⑥）の「いい」や、「もういいよ」と言う時（⑦）の「いい」の意味である。

さて、このように「よい」の意味が整理出来たわけだが、すると、先に問題となった、D の「まあいいか」の「いい」は、どういう意味になるだろうか。この点も含めて、A～D それぞれの内容や相違をより明らかにするために、以下では A～D の全てについて見てみよう。（その際、便宜上、B→A→C→D の順に扱う。）

¹¹ 疑問その 2 を巡る以下の議論（①～⑦よいを説明する議論）は、次の拙稿（の 1－3）に基づく。「よく生きるとはどう生きることか——幸福についての試論——」（『國學院大學紀要』第 52 号、2014 年、99～127 頁）

¹² すると、例えば「いい人」という表現も、意味の違いに応じて、次のように分類出来る。即ち、①良い人＝出来のいい人。②善い人＝心根のいい人。③好い人＝感じのいい人。⑤いい人＝ふさわしい人（例えば、適材適所に人を配置する時にこういう言い方が出来る）。

・B：(その通りだと思うので)そのまま認める(例：「そうです」)、の場合

この場合、肯定されるものには、①②③よいもの・①②③悪いもの・どちらでもないものを含め、色々なものがあり得る。(例えば、③好いものがBの意味で肯定される場合としては、他人に指摘された自分の好みを「事実として正しい」と認める場合が挙げられる。)

・A：(本当によいと思うので)そのまま認める(例：「いいね!」)、の場合

この場合、肯定されるものはどのようなものか。我々は、例えば、①良いパソコンや②善い行いを「いいね!」とは必ずしも思わない。(パソコンとしては「①良い」ことや行いとしては「②善い」ことを事実として正しいと認めた(B)からといって、そのパソコンや行いを「いいね!」と思える(A)とは限らない。)だが、これに対し、例えば③好い色は必ず「いいね!」と思えるし、そう思えない色はそもそも③好い色とは言えない。(勿論、「自分には確かに③好い色であること」を認める(B)こともまた出来る。)すると、Aの意味で肯定されるのは「③好いもの」だと言える。つまりAの意味は、「(本当に③好いと思うので)そのまま認める」だと言える。また、この場合、「認める」というのも、Bのように「正しいと認める」ではなく、「喜んで認める」の意味となる。勿論、「特定の①良いものや②善いものを喜んで認める」という場合も現実にはある。だが、それはつまり、「その①良いものや②善いものを③好いと思うからそれを喜んで認める」のであり、言わば複数種のよさが重なったに過ぎない。故に、やはり、Aの対象は結局は③好きである。実際、我々には、「特定の①悪いものや②悪いものを喜んで認める」という場合もあり得るし、それどころか、「特定の③悪い(筈の)ものを(何らかの理由から)喜んで認める」という場合すらあり得る(例えば、苦しみを求めることで結果としては満足を得るという場合である)。すると、やはり、Aは、「(本当に③好いと思うので)喜んでそのまま認める」、となる。また、他方、Bは、「(その通りだと思うので)正しいとそのまま認める」、となる。

・C：(条件を満たすと思うので)そのまま認める(例：「OKです」)、の場合

この場合、肯定されるものには、確かに、Bと同じく、(①②③よいもの・①②③悪いもの・どちらでもないものを含め)色々なものがあり得る。但し、それらは何れも、満たされるべき条件を十分に満たしていなければならないし、そうでなければCの意味での肯定は為され得ない。(なお、現実問題としては、例えば①②悪いものよりも①②よいものの方がCの意味で肯定されるケースの方が多いだろうが、しかし条件次第では、①②悪いものが肯定されるケースもあり得る。例えば、腕の①良い職人をテレビ番組で取り上げる際にその引立て役として採用されるべき者は腕のより①悪い者であるし、詐欺師として詐欺師仲間に認められる筈の者は②悪い者である。)よって、Cで肯定されるものとは、条件に対して十分なものであり、その意味で、それらは何れも⑦よい——例えば「もういいよ」の「いい」——ものということになる。即ち、Cは、「(条件を⑦よく満たすと思うので)適格なものとしてそのまま認める」、となる(つまり、Cの対象は⑦よさだということになる)。

・D：(積極的に認めるわけではないが)そのまま認める(例：「まあいいか」)、の場合

以上のB・A・Cに対し、Dで肯定され得るものは、言わば「A・B・Cでは肯定されないもの」である。即ち、『本当に③好い』とは思われないもの(⇔A)・『その通り』と

は思われぬもの」(⇔B)・『条件を⑦よく満たす』とは思われぬもの」(⇔C)である。そして、それにも拘らず、Dではそのまま認められる。従って、次のように言える。

- ・「Aの否定」としてのDは、「喜んでではないけれどもそのまま認める」、となる。
- ・「Bの否定」としてのDは、「正しくないけれどもそのまま認める」、となる。
- ・「Cの否定」としてのDは、「適格ではないけれどもそのまま認める」、となる。

つまりDは、「(積極的に認めるというわけではないが)構わずそのまま認める」、となる。また、先に問題となった、Dの「まあいいか」の「いい」は、既に登場した⑥よい——例えば「別にそれでいいや」の「いい」——という意味であることが分かる(つまり、Dの対象は⑥よさだということになる)。

さて、既に見た通り、「肯定されるもの」は(また「肯定すること」も)、必ずしも「よい」とは言えなかったわけだが、その理由がここまでの議論で一層明らかとなった。特に、Dの場合(例えば件の「息子」の場合)、「積極的に認めるというわけではないもの」が或る種の妥協の結果として⑥よし(=構わない)とされる。つまり、現在の⑥よさ(=構わなさ)を除けば、「肯定されるもの」は(また「それを肯定すること」も)必ずしも「よい」とは言えない。また、Aの場合も、肯定されるのは「現在の自分が思う③好き」であり、それを除けば、「肯定されるもの」は(また「それを肯定すること」も)必ずしも「よい」とは言えない。なお、B・Cについて言えば、「肯定されるもの」はよいものとは限らなかった(B)し、或いは、精々のところ⑦よい(=充分な)ものでしかなかった(C)。また、「それを肯定すること」が「よいこと」と言えるかどうかも状況や条件次第だった。それ故、やはり、必ずしも「よい」とは言えない。

Ⅲ. 問題の確認、及び、問題解決の難しさの確認

さて、Ⅱの冒頭で述べたように、「自分の人生を肯定出来るかどうか」は人生の大問題だろうし、同様に、「世界の現実を肯定出来るかどうか」は人類の大問題だろう。だが、今確認したように、「肯定されるもの」は(また「肯定すること」も)必ずしも「よい」とは言えない。すると、「肯定された人生」や「肯定された世界」は(また「人生を肯定出来ること」や「世界を肯定出来ること」も)、実際には必ずしもよくはない。

しかし、それにも拘らず、現に我々はそれらを求めている。¹³(だから、実は我々は、必ずしもよくはないことを求めている。)

すると、では、この「大問題」で実際に求められているものは、一体何なのだろうか。単純に考えるならば、次の二つが挙げられる。

- ・ α : 自分や人類にとって③好い人生や世界。(勿論、例えば「①良い人生・世界や②善い人生・世界であることによって実現される、③好い人生・世界」といったものも、ここに含めて構わない。) 言わば「理想」の人生や世界。
- ・ β : 自分や人類にとって⑥よい(=構わない)人生や世界。言わば(大なり小なり)「妥協」された人生や世界。

但し、勿論大原則として、 α も β も(③⑥以外の意味では)必ずしもよくはない(ア)。こ

¹³ なお、これに対して、フランクが提示する生き方は、言わば「求めない」というものである。これについては後ほどⅣで述べる。

の点は注意すべきだが、注意すべき点は他にもある。例えば次のものが挙げられる。

- ・イ： α と β とでは、 α は β よりも③好いが、 α は β より①②悪いこともあり得る。
- ・ウ：また、 α は β より実現困難である。つまり、厳しい現実を思い通りに変える我々の力には限界がある以上、言わば次善の策として β が目指されがちである。
- ・エ：だが、実際は β も実現は容易でない。つまり、気持ちを思い通りに変える力には限界がある以上、例えば後悔や不満に対し「まあ⑥いいか」と中々心からは思えない。言わば、「外」へのみならず「内」への我々の力にも限界がある。

このように、 α も β も必ずしも「よく」はないし（ア）、実現も簡単ではない（ウ・エ）。（なお、イについては本稿では措く。¹⁴）つまり我々は、人生や世界を肯定すること（ $\alpha \cdot \beta$ ）の難しさ（ウ・エ）や、肯定することが孕む問題（ア）に直面せざるを得ない。

では、これらの問題（ア・ウ・エ）は解決出来るのだろうか。普通に考える限り、解決は難しい。そもそも、例えば①良さ・②善さ・③好さがそれぞれ独立していると思えず限り、アが既に解決不可能だと思われるからである。また、ウ・エも解決は難しい。当然のことだが、人生や世界には③⑥悪いこと、即ち③嫌なことや⑥無視出来ないこと（例えば、悔やまれること・何とかしたいこと・気になること…）があるからである。しかも、解決が難しいという事実を意識することが当人には重ねて③⑥悪いものとなり易い。このように、人生や世界を肯定する（出来ればA、せめてD）などやはり無理であるとも思われる。

勿論、「それらの③⑥悪いことが③⑥よくなるように努める」のが我々の人生であり人類の歩みでもある。また、そういう風にして我々の先人は、より③⑥よい世界を目指して只管行動して来たのだとも言える。それ故、我々がこれらの問題（ア・ウ・エ）に直面した際に、「そんな問題に悩んでいるくらいなら、ゴチャゴチャ考えずに兎に角目の前のことを頑張れ！」といった仕方で助言されるとしても、それは尤もであるとも言える。

とは言え、冷静に考える限り、色々頑張っても③⑥悪いところはどうしても残るようにも思われる。先に見た通り、我々の力（即ち、「外」や「内」を変える力）には限界があるからである。（勿論、「我々の力は無限！」と熱狂的に妄想すれば、「③⑥悪いところもいつかはきっと根絶出来る！」とその時は思えるのだろうが、だが、そういう言わば「酔っ払った」姿は、素面になって思い返せば幻滅するだろうし、また、妄想に生きるのも空しい。）

では、この問題は、考えても解決には近づけないのだろうか。例えば、どうしても残る③⑥悪いところも含めて人生や世界を肯定するというやり方はいり得ないのか。もしもそれがあり得るのであれば、問題解決に近づけるのではないか。すると、その可能性について検討の余地ぐらひはあるだろう。

だが、即座に次のような反論が出されるかも知れない。曰く、『③⑥悪いところはどうしても残る』のだから、それも含めて人生や世界を肯定するなど、実際は不可能ではないのか。だから、それは絵に描いた餅ではないのか。つまり、現実を冷静に見詰める限り、我々には問題を解決することはやはり出来ないのではないのか。』

では、このような反論に対し、どのように応答することが出来るのだろうか。

¹⁴ この問題については前掲（註11）の拙稿が参考になろう。故に、本稿では特に注目はしない。

IV. 問題の解決に向けて

確かに、既に見たように我々は、現実を冷静に見詰める限り、自分の人生や世界の現実の全体を肯定することの難しさ（ウ・エ）や肯定すること自体の問題（ア）に直面せざるを得ない。また我々の能力には限界がある。故に普通に考えれば解決は不可能に思われる。

ただ、次のことに注目したい。それは、世の中には満足しながら人生を生きているように見える人達もいることである（或いは少なくともそう見える人達を想像することは我々には不可能ではないことである）。では、その人達については如何に理解すべきか。

確かに、その人達は多分、文字通りの意味では α を得ていない。どんな小さな不満も無かったというのは、人間という不完全な存在には実際には不可能だと考えられるからである。すると、考えられるケースとしては、例えば次のものが挙げられる。

- ・ 第一：他人からはそう「見える」だけで、本人はそう思っていないケース。（故に、このケースは本稿が注目するものではない。）
- ・ 第二：不満の存在を忘れていたり、注意が向いていなかったりしているケース。（だが、それは、例えば忘却という言葉で「時の恵み」とも言うべきものであり、意図的には真似出来ないため、本稿が注目するものではない。）
- ・ 第三：不満の存在に眼を瞑ろうとして、不満が無い振りをしているケース。（だが、それは自分を偽っているに過ぎないため、本稿が注目するものではない。）
- ・ 第四：基準が極めて低く設定されているため、ごく僅かのもので満足出来るケース。（だが、その人達は人生や世界をよりよくしようとしているわけではなく、単なる自己満足でしかないとも言えるため、本稿が注目するものではない。）
- ・ 第五：色々不満もあるがそれ以外は満足というケース。（だが、それは「③⑥悪いところが残っている」ということであるため、本稿が注目するものではない。）
- ・ 第六：色々あったし現に色々あるけれどもそれも含めて満足というケース。（本稿が注目したいのはこれである。）

この〈第六〉——以下、それぞれのケースを指示する時はこのように〈 〉で括って表記する——では、確かに α は得られていない。自分の人生が必ずしも③よくはないことを、〈第六〉は正直に認めているからである。故に、この点で、〈第三〉・〈第四〉とは異なる。また、これは〈第五〉とも違う。何故なら、そこでの「満足」が「不満」は含んでいないのに対し、〈第六〉での「満足」は不満である筈のものを含んでいるからである。故に、この〈第六〉は、どうしても残る筈の③⑥悪いところも含めて人生を肯定出来ている。

ところで、〈第六〉での「満足」が実は何らかの「妥協」を伴っている場合——例えば、「あのことは別に⑥いいか」といった仕方で思う場合¹⁵——、得られるのは β である。

¹⁵ その内、このように（即ち、③好いとまでは言わずとも、⑥よいとは）自然に本心から思える人の場合、それは言わば「天賦の性分」であり、意図的には真似出来ないため、本稿が注目するものではない。

他方、このように思えることを促そうとする考え方は世の中に色々であろう。例えば、『人間万事塞翁が馬』とも言うし、それに、この後頑張る挽回もするから、あれはあれで⑥いいやとか、「不満よりも満足の方が多から、総計で言えば満足（だから不満については気にならない）」といったものが挙げられる。但し、前者の例の場合、運も向いてこないし「この後頑張る」も「挽回」出来なければ、結局は失敗したことになる（すると、その結果としては、〈第三〉や〈第二〉に至りがちになるだろう）。他方、「挽回」出来たならば、後者の例に近づいていくのだろうが、但しこの後者の場合には、「では、もしもその『不満』がより少なかったならば、その分だけ更に満足出来ていた筈ではないか」という想定も許容出来てしまうため、すると、そうなること寧ろ〈第六〉から離れて行きがちになってしまう。

だが他方、本心から「満足」しているならば、得られるのは β ではない。その場合、当人は自分の人生における不満である筈の様々なものを認めた上で、それに対しても「満足」している。その意味で、(大袈裟に言えば)不幸に属す筈のことにも「満足」している。

すると、 β を得るのでもなく、しかし既述の通り α を得るのでもない、〈第六〉の内のこの種の場合(以下、これを《第六》と表記)について、これを如何に理解すべきか。¹⁶

この、《第六》に至ることを促す候補となる考え方として、ここではまず次のものを挙げたい。それは、『苦悩は本来の人生に属している (das Leiden zum eigentlichen Leben dazugehört)』¹⁷のであり、そもそも、③好さを求めるという我々の態度こそが変更されねばならない」という考え方である。¹⁸実は、フランクが提示する考え方(註13)の基本はまさにこれである。それはつまり、『我々は人生から③好さを求める』という我々の通常の態度を言わば180度転回して『我々は人生から求められている』という態度にする、という考え方である。¹⁹この場合、我々が人生から求められているのは最早③好さの獲得ではない。彼は、「責任 (Verantwortung / ver-antworten)」という語を用いる。²⁰言わば「責任存在 (Verantwortlich-sein)」²¹である我々は責任を果たすことによって生きる意味をいつでも得ることが出来る、というのが彼の基本的態度である。それ故、彼は、「人が『この世にいるのは楽しみのためではない』 (man ist „nicht zum Vergnügen auf der Welt”)」²²と明言している。従って、この「生きる意味」は α とは別種のものである。それは例えば幸福といった③好さの次元には無いからである。²³また、無理無くこの態度がとられる場合、それは β とも別種のものだということになる。故に、彼の言う「生きる意味」を、仮に「 γ 」と差当り名付けることが出来る。²⁴

何れにせよ、本稿の探求の方向は β の獲得の方ではない。故にこちらについてはこれ以上は割愛する。
¹⁶ 前註と同様に、つまりは(⑥よいどころか)③好いとまで自然に本心から思える人の場合も、それは言わば「天賦の性分」であるが故に本稿が注目するものではないのだが、その人は実は既に α を得ている——故にその実在は疑わしい——と言えるが故に、そもそもここでの対象外である。

また、(⑥よいどころか)③好いとまで思えることを促そうとする考え方の探求も本稿の方向ではない。何故ならば、「③好いと本心から思えること」は受動的な事象であるが故に、能動的な促しにはそもそもそぐわないからである。故に、本稿が採る方向は、 α の獲得とは(また β の獲得とも)異なりはするものの、それでも或る種の「満足」と言い得る状態に至ることを能動的に促す考え方の探求である。

¹⁷ FRANKL1947, p.39. cf. id., op. cit., p.26; FRANKL1977, p.104

¹⁸ cf. FRANKL1947, pp.16-19

¹⁹ cf. id., op. cit., p.19, 62; FRANKL1977, p.117f.

なお、それ故に彼は——註7でも少し触れたが——そもそも我々が生きる意味を問題にするのは適切ではないとも見做している。cf. FRANKL1947, p.19, 62; FRANKL1977, p.117

²⁰ e.g. FRANKL1947, p.27, 30, 34, 62, 76, 88f.; FRANKL1977, p.118

²¹ FRANKL1947, p.27

²² id., op. cit., p.16

²³ cf. 「実際、我々には幸福など決して問題ではなかった——我々を持ちこたえさせたもの、我々の苦悩と犠牲と死に意味を与えることが出来たもの、それは幸福ではなかった。」(FRANKL1977, p.139)。

但し、他方で彼は次のように冷静に述べている。「幸福になるというほんの僅かの可能性でも、人間にとっては、幸福でないという絶対的な確実性よりも、まさにそれ以上のものなのです。」(FRANKL1947, p.86)。この両引用からは、人間にとって幸福や希望が言わば「厄介な代物」でもあることが窺われる。

²⁴ 尤も、正直に言えば筆者は、「彼の言う『生きる意味』とは一体如何なる意味か」という、そもそもの疑問を持ってもいる。それは例えば「生きる価値」のことか。それとも「生きる目的」のことか。それとも「生きる動機」のことか。「生きる成果」のことか。「生きる証」のことか。「生きることを言い換えたもの」のことか。それとも別の何かのことか。その点が筆者にはよく分からない。

なお、諸富氏によれば、フランクは「意味とは何を意味しているか」という表題の論文で、「人生の意味」の問題を適切に考えるためには、差当り、「意味の独自性」と「意味の超主観性」の二点は押さへ

この考え方をとれば、確かに、「不満である筈のものは言わば人生が我々に投げかけた問いであり、それに答えようと努めたことで自分の態度は既に報われており、自分はその意味で満足だ」とも言える。これは言わば「目から鱗」の見解であり、満足（③好き）よりも不満（③悪さ）の方が多であろう我々の実情に即した説得力を持っている。恐らく彼自身が経た過酷な体験から醸成されたであろうこの考え方²⁵を、故に筆者も尊重したい。

この考え方の優れた点は、件の説得力の他、次の点にもまた認められる。即ち、 γ が意味する「満足」とは、③好きが意味する通常のものではなく、②善さ（或いは①良さ²⁶）が意味する特殊なものだ、という点にである。するとやはり、仮令③好きを生まざとも²⁷、 γ の獲得は、それが何らかの意味での満足を意味する限り、確かに《第六》に該当しそうである。

更に、この点と連動して、この時の肯定のされ方も通常（A・D）とは異なっている。即ち、この時、肯定される「人生」とは（少なくとも）二つの意味に解し得る。一つは我々が責任を果たす言わば「機会（Gelegenheit）」²⁸や舞台として。もう一つは——今注目したいのはこちらの方なのだが——我々が責任を果たすそのありようとして。その場合、「人生は言わば問いが要求する答えとしての条件を⑦よく満たすものとして肯定されている」と言える。つまりこの場合、我々のありようはCの意味で、即ち適格なものとして、言い換えれば⑦充分なものとして、故に⑦よいものとして、肯定されているのである。

上述の、②善さ（或いは①良さ）が意味する特殊な「満足」と、満たすべき条件を満たすこの⑦よさとは何らかの繋がりがあろう。すると、彼のやり方は確かに、通常（A・D）とは異なる仕方で人生を肯定（C）し、また、通常（D）とは異なる仕方で《第六》に至るものであると、そう言えそうである。この点でも筆者は彼の考え方を尊重したい。

だがその上で、気になる点も指摘したい。例えば、第一に、彼が提示するこうしたありようは言わば真面目さに偏っているのではないか。仮に、彼の立場に則って、「我々は人生が我々に求める責任を果たしながら生きることで、人生を肯定（C）することや生きる意味（ γ ）を得ることが出来るし、また、それは何時如何なる場合でも可能²⁹である」と言えたとしても、しかしそのような、責任を果たすことに（言い換えれば人生からの問いに応答することに）言わば義務付けられ、言わば付き纏われた人生は、なるほどそれを果たそうとする限りは確かに②善い人生（或いは①良い人生）ではあろうし、また、⑦よい人生でもあろうが、しかしそのような仕方で仮令《第六》に至ったところで、既述の問題ア

ておく必要があると言っている（『人生に意味はあるか』、163～166頁）。だが、そこで語られているのは、彼の言う「人生の意味」が持つ二つの性質についてであり、そもそも彼の言う「人生の意味」の語義についてではない。また、同氏が紹介する同論文での彼の「結論」を読んでもその点にはよく分からない（同書 167～168頁）。即ち、彼は「人生の意味とは何であるか」の「結論」として、「意味とは、意味されているものである」と述べた上で、「私は、私が〔人生から〕問われている問いの真の意味を見出すためにベストを尽くさなくてはならない」（〔 〕内は筆者による補足）と述べているのである。隔靴搔痒の感は否めない。

ともあれ、このような次第で、例えば、「どんな人生にも生きる意味がある」という彼の見解が何を意味しているのかもまた、筆者には実はよく分からない。彼は「意味」という語の豊かさに助けられていると共にその曖昧さに言わば足を引っ張られてもいるように、筆者には思われる。註7も参照のこと。

²⁵ FRANKL1947, p.40; FRANKL1977, p.119

²⁶ FRANKL1947, p.34, 39f.

²⁷ なお、彼は、幸福は目標ではなく責任を果たした結果に過ぎないと考えている。cf. id., op. cit., p.18

²⁸ id., op. cit., p.34

²⁹ cf. id., op. cit., p.90

は依然として解決出来ていないのではなからうか(勿論、それは当然なのかも知れないが)。

第二に、この根本の点は措くとしても、彼の言う態度を我々に求め続けるのは酷ではないか。つまり、理屈では可能でも、実際には責任を果たし続けるのは困難ではなからうか。

第三に、彼のやり方をとりさえすればそのような「満足」が実感として得られる、とは限らないのではないか。勿論、得られる人もいるだろう。だが、そうでない人もいないか。つまりは当人次第ではないか。³⁰従って、「そもそも我々は責任を果たし続けられるのか」という第二の問題も措くとしても、「現に責任を果たし続けているのに人生が空しく思われる」ということも我々にはあり得るのではないか。これに対し、彼は、少数の成功例が存在すれば充分だと見做しているようにも見える。³¹すると、彼の提示する生き方は傾聴に値する一方で、言わば「人を選ぶ」という側面もあることもまた否めない。

第四に、このやり方では、過去に対しては我々は言わば無力ではなからうか。³²すると、態度変更が出来た時期は《第六》に仮令該当したとしても、しかしそれ以外の時期は《第六》には該当せず、故に結局は《第六》には該当しない、とはならないのだろうか。

第五に、第四の問題は措くとしても、このやり方では、自分の人生は肯定(C)されたと仮に言えたところで、世界の現実の方は実は肯定されてはいないのではないか。肯定されているのはあくまで、世界の現実に対応する自分の人生のありようだからである。すると、より正確に言えば、自分がとった②(①)⑦よい態度の方は兎も角として、その態度の対象としての(人生や世界の)内容の方は、必ずしも肯定されてはいないのではないか。

このように、フランクルの基本的立場は注目に値する一方で、気になる点も少なくない。(ただ、「だからその全てがダメだ」ということではないということも、強調しておきたい。)

そこで、筆者としては、これとは別の考え方も提示したい(勿論、何れの考え方がそれ自体として問題が少ないのかの即断は出来ない)。それは、「あの特別の選択をしなかったんだから、その選択は出来なかったんだ」という考え方、俗に言う「運命を受け入れる」という考え方である。³³その場合、「あの特別の選択をしていれば…」という発想自体が不

³⁰ cf. id., op. cit., p.11

³¹ cf. id., op. cit., p.12f., 70f.

但し、他方では次のような指摘もある。「実際、生きる意味が見いだせなくて悩む人を導き、自らそれを発見させるフランクルのロゴセラピーは、『どんな人生にも生きる意味がある』ということを発見させるのである。」(佐藤透、『人生の意味の哲学 時と意味の探求』、春秋社、2012年、18頁)

ただ、このような指摘があるからといって、「責任を果たし続けることで誰もが本当に《第六》に該当することが出来る」と本当に認めても構わないのかどうかは、また別の話だろう。

³² フランクルは、過去に意味を見出すという議論も確かにしている(e.g. FRANKL1947, p.30; cf. 諸富祥彦、『人生に意味はあるか』、171～173頁)。だがそれは、「ひとたび責任を果たした過去は変わらず保存されているが故にその意味は最早消失しない」という意味においてであり、「嘗て責任を果たさなかった過去に対して今から責任を果たすことが出来る」という意味においてではない。すると、彼の議論は過去に対しては、今の意味ではやはり無力だろう。

³³ なお、これと似てはいるが異なる考え方として、(特に過去の後悔に対して)「それが無ければそもそも今の自分は無いわけだし、それがあったからこそ今の自分がある(故にそれも含めて満足出来る)」というものが挙げられる(このような考え方はフランクルにも窺われる(cf. FRANKL1947, p.25f.))。

ただ、その場合、そもそも「今の自分」に満足していなければ、「あの特別の選択をしていれば別自分になれた筈なのに…」となってしまう。また、(例えば、「苦しい過去があったからこそ、そのお陰でその後成長も出来たし、今の楽しい生活もある」といった仕方)で「今の自分」に仮令満足している(cf. id., op. cit., p.45, 48)としても、「もしもあの特別の選択をしていたならば、或いはもっと満足出来る自分になれた筈だろうな…」という想定も許容出来てしまうため、すると、そうなるなら寧ろ《第六》から離れて行きがちになってしまう。故に、こちらの考え方では《第六》を必ずしも上手く説明出来ない。

合理となる。とは言え、それは、人間の自由の能力を否定するものではない。寧ろ、両者は両立する。故に、現状に対して何の努力もしないというのではない（従ってそれは、例えば先の〈第四〉とは違う）。寧ろ、「人事を尽くして天命を待つ」というあり方に（同じではないが）近い（従ってそれは、過去～現在に対してのみならず、現在～未来についても適用出来る考え方である）。³⁴また、「やれた筈なのにやらなかったということは、結局、やらなかったということなんだ」と理解するあり方である。また、「変えられるかも知れない現状は変えようと努力もするが、変えられない現状には満足する」というあり方である。それ故、結果を受けいれ、過去を受けいれ、限界の存在を受けいれるあり方である。³⁵

勿論、これが出来ない時には精々 β が得られるだけだが、しかし出来る時には β とは（また α と）違うものが得られる。それはつまり、どうしても残る③⑥悪いところも含めて「満足」される自分の人生であり世界の現実である。更に、それは γ と異なる。 γ は、責任を十分に果たすことに基づくという意味で②⑦よさの次元に——或いは、困難に十分に立ち向かうことに基づくという意味で①⑦よさの次元に——基づくと言えるのに対し、今問題としているものはそうではないからである。そこでこれを「 δ 」と呼ぶことにする。

では、 δ が得られる境地、運命を受けいれる境地に、我々は何によって促されるのか。それは、物事の必然性を理解することによって、だと考えられる。つまり、もしもそれが理解出来るのであれば、それは、「別のあり方が不可能であると理解したこと」を意味する。すると、そもそも別のあり方を望むことそれ自体が不合理であることが理解出来る。（勿論、物事の必然性を頭で理解出来ることと物事の妥当性を気持ちで納得して満足出来ることとは違う。だが、前者は後者を促すものであるということもまた確かだろう。）

では、この、「必然性の理解」というのは、如何なる性質のものと言えるのか。まず、それは、物事の必然性を事実として正しいと認めるもの³⁶なので、B の意味での肯定に該当する。更に、それは、必然性を事実と認めているだけであり、よいと認めているわけではない。すると、この、「必然性の理解」という事実判断に由来する満足（= δ の獲得）は、よさという価値判断に由来する満足や納得（= $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ の獲得³⁷）とは異なる。ということは、ことによると、自分の人生や世界の現実について、「その必然性の理解」というこ

³⁴ この点を誤解して、所謂「運命論者」となって未来への努力を放棄すると、破滅的となる。

なお、フランクもまた、「運命（Schicksal）」という語を用いながら、それにあっさり飲み込まれるのではなく「人事を尽くす」という本稿と似た考えを提示している（e.g. id., op. cit., p.41f., 61f., 83. cf. id., op. cit., p.72; FRANKL1977, p.101f.）。尤も、彼の場合は、こうした考えを支えているのが、件の「180度転回」した態度であるようにも窺われるが、しかし少なくとも、本稿の立場はそうではない。

もう一点注意しておけば——先に彼の考え方に対して本文で提示した「気になる点」（の例えば最初のもの）からも窺われるだろうが——筆者は現在～未来に対して彼のような仕方で「人事を尽くす」ことが望ましいことだとは必ずしも考えていない。これについては前掲（註11、14）の拙稿も参照。

³⁵ cf. FRANKL1947, p.25, 63 なお、前註同様、この点でも——つまり、運命に対する態度を支える態度は何かという点でも——フランクと本稿とでは立場が区別出来るようにも見える。

³⁶ 勿論、事実としてはその「物事」を支配しているのは或いは本当は寧ろ偶然性と言うべきものなのかも知れない。だが、少なくとも、既に起こったことについてはそこに事実上の必然性（も）認めることが出来る。故に、過去～現在に対しては、現実に対する必然性の支配を見出すことが出来る。

では、現在～未来に対してはどうか。これも、必然性が認められるその限りにおいては今の議論は成り立つ、と、その程度のことは差当りは認められるのではないだろうか。勿論、「では必然性が認められるのはどの範囲においてなのか」という厄介な疑問は出てくるだろう。だが、今は、そこまでは立ち入らないことにし、件の点（即ち「その程度のこと」）が差当りは認められることでよしとしたい。

³⁷ α の獲得は③好きに、 β の獲得は⑥よさに、それぞれ由来するが、 γ の獲得もまた②善さ（或いは①良さ）や⑦よさに由来する。その意味で、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ の獲得は何れも、よさという価値判断に由来する。

の肯定 (B) は、「責任を果たすこと」による肯定 (C) では必ずしも解決出来ないところの、「その内容の肯定 (A・D)」に関する問題を——特に、(問題エや問題ウのみならず) 問題アすらをも、そして付け加えて言えば問題イをも——解決 (或いは寧ろ解消) 出来るかも知れない。³⁸すると、その点では、この肯定 (B) は、他の肯定 (A・D・C) よりも優れているのかも知れない。少なくとも、「必然性の理解」は、自分の人生や世界の現実に満足するための (A・D・C とは) 別の可能性を開いてくれるということと言えるだろう。

V. 次の作業に向けて

さて、本稿の I の終わりで次のように述べた。「『遠回り』をすることによって、『どうしたら幸せになれるのか』こそを問うという『普通の道』で我々を待ち構えている困難を寧ろ解決することが出来るかも知れない」、と。その後こうして現に「遠回り」をして来たわけだが、それを終えた今では、この点が、即ちIVの終わりで述べた「別の可能性」が、幾分かは見えて来たのではないだろうか。してみれば、同じく I の終わりで述べた「得られていない成果」もまた、今やそれなりに得られるには至ったのであり、従って、このそれなりの成果に至る遠回りの議論もまた、それなりに正当化されたのではないだろうか。

そこで、次の作業として、この「別の可能性」の更なる検討が望まれる。それには例えば、自分の人生や世界の現実を肯定することについて考えている過去の哲学者達の議論を参照することを通じて、本稿の成果を吟味・確認・補強していく、といったものが挙げられるだろう。とは言え、そのような具体的作業は別の機会に俟ちたい。

参考文献 (本稿で言及したものに限る)

- ・秋山智久、「人間の苦悩と人生の意味——社会福祉哲学の根本問題——」(『學苑 人間社会学部紀要』、第 844 号、昭和女子大学、2011 年、45～59 頁)
- ・FRANKL, Viktor E., ...*Trotzdem Ja zum Leben sagen. Drei Vorträge*, Franz Deuticke, Wien, 1947.
- ・FRANKL, Viktor E., ...*Trotzdem Ja zum Leben sagen. Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, Kösel, München, 1977, Neuauflage, 2009.
- ・フランクル、V・E、『それでも人生にイエスと言う』、春秋社、1993 年
- ・フランクル、ヴィクトール・E、『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』、みすず書房、1961 年、新装版、1971 年
- ・フランクル、ヴィクトール・E、『夜と霧 新版』、みすず書房、2002 年
- ・岸貴介、「よく生きるとはどう生きることか——幸福についての試論——」(『國學院大學紀要』、第 52 号、2014 年、99～127 頁)
- ・諸富祥彦、『人生に意味はあるか』、講談社現代新書、2005 年
- ・諸富祥彦、『100 分 de 名著 フランクル 夜と霧』、NHK 出版、2012 年
- ・佐藤透、『人生の意味の哲学 時と意味の探求』、春秋社、2012 年
- ・武田修志、『人生の価値を考える 極限状況における人間』、講談社現代新書、1998 年

³⁸ 例えば、別のあり方を望むことの不合理を理解することで、このやり方は、フランクルのやり方に対する既述の「気になる点」の、少なくとも第一・第四・第五の解決 (解消) を促すように思われる。

